

Title	足利時代の日明交通(中)
Sub Title	
Author	宮島, 貞亮(Miyajima, Teisuke)
Publisher	三田史学会
Publication year	1924
Jtitle	史学 Vol.3, No.4 (1924. 11) ,p.135(605)- 148(618)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19241100-0135

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

足利時代の日明交通（中）

第一編（足利中期）義教義政

時代の日明交通

第四章 義教時代の交通

第十五節 僧道淵等の遣明

正長元年（宣徳三年）正月十八日義持薨じ、勝定院と號す。其の弟義圓還俗して義宣と稱し、永

享元年三月十五日征夷大將軍に補せられ、更に義教と改名せり。京都將軍家譜此より彼我の交通一層組織的となり、益々親密を加ふるに至れり。

將軍義教は永享四年（宣徳七年）琉球より明主の日明交通を希望する旨傳達したりしかば。錄嘉靖

大乗院日錄八月十六日の條に、

渡唐船出攝州共庫岸。將軍下向給。四號舟人數。大乘院初而被加之十三人。

とあるは即ち是なり。然れども其の記載の詳なる満濟准后日記に若くはなし。即ち永享四年六月三

廿五年三月庚辰の條同年八月僧道淵等をして表及び方物を齎し、明に遣はしむ。親ら共庫に赴き使船を觀、行

を壯にし島津忠國に命じ硫黃十五萬斤を輸し、少

貳滿貞及び對馬國人をして其の航路を警衛せしむ。此の時の遣明船は五隻より成り、將軍の外諸

大名其の船舶貨物の調達、設備、旅費等一切の經

費を分擔せしこと満濟准后日記により察知すべし。

日の條に、

唐船事。大略今日治定了。寄合八幡丸
號船也 船事。

赤松奉行。面々催促之。舟修理以下事可申付云々。此由被仰付了。(中略) 唐船奉行事等。不審。

次侍所上表事。來八月御下向兵庫。其次明石并播磨書寫山以下。可有御一見。云々。旁營々閒。京都者共大略可召具之閒。御留守中殊一大事也。可被仰付餘人條。可畏入旨。歎申入。云々。

同年同月五日の條に、

自赤松使者上京二郎左衛門云々。唐船御人數。武家方事。畠山右京大夫一色細河讚岐赤松以五人上候。其外御人數。門跡以下事。内々爲此門跡可被仰云々。先只今八幡丸船頭方へ可下行用脚七百疋候。此御舟御人數。御門跡以下悉皆十人候歟。然者七千疋。各今明閒可有御沙汰云々。同七月十二日の條に、

次今度就唐船事。島津庶子惣領。自去比島津庶子伊集院ト合戰。島津惣領大略及難儀。仍唐へ可被硫黃。去年以來被仰島津十五萬斤用意處。及庶子惣領合戰之閒。無覺束被思召閒。禪僧號瑞
書記此閒自九州令參洛也重今明可被下遣。仍此僧申請旨。島津庶子惣領方へ御教書硫黃令奉行
可渡云々事事等申。就其少貳方へ御教書事簡要之由。申閒。可被成遣也。仍小貳事。可爲何様哉。云々。予御返答。少貳此間非御勘氣之儀。今度御料國筑前國へ無左右打入條。狼藉次第。御切諫歟。對馬國等當時モ知行儀候歟。就唐船警固。第一簡要方間。尤可被成遣歟。云々。御使赤松播磨守也。次島津庶子伊集院へ御教書事。惣領庶子共可被遣者。無子細候。萬一惣領合戰ニ打負候者。只今御教書無益トテ使節僧瑞書記十ト相計。庶子伊集院方計へ付御教書候者。只今硫黃御用計ニ不及是非御沙汰。以庶子被相定惣領様

ニ申成候ハムスラント存候。但可爲時宜云々。

及び方物を贈れり。

赤松播磨守尤由同心也。とあり。

日本國王源義教遣使臣道淵等。奉表貢馬及鎧

永享四年六月三日に唐船事大略治定せられし

甲蓋刀等方物。

○皇明實錄宣德八年五月甲寅の條

と雖、「仍唐へ可被渡硫黃。去年以來被仰島津。

賜日本國琉球國迤北和寧王等貢使宴。

十五萬斤用意處云々」より察すれば永享三年よ

○同書同年四月庚申の條

り渡明の用意ありしこと明なり。
義教より明主に贈りし表文の主意は舊交を求めんと欲せしものにして其の表文は次の如し。

天啓大明。萬邦悉被光賚。海無驚浪。中國茲占平。凡在率濱。孰不惟賴。欽惟大明皇帝陛下。

賜日本國使臣道淵等二百二十人。紵絲紗羅絹布及金織襲衣絹衣銅錢。有差。賜朝鮮占城日本三國貢使宴。

○同書同年四月丙子の條

道淵等が彼地に於て非常なる優遇を受けしこと滿濟准后日記永享六年四月十一日の條に、

四聖傳業。三邊又安。固緣幣帛多虞。行李往來願復治朝舊典。是以謹使某人仰觀國光。伏獻方物。爲是謹具表。

かくて明主は六月上旬、道淵に勅諭して其の朝貢を謝し之に僧錄司右覺義の職を授け併せて義教の恭謹の態度を賞せり。其の勅書は次の如し。

尚ほ道淵等は用意のため其の年に渡明すること能はず翌年春渡明し五月北京に至り明主に謁し表

宣德七年八月十日　　日本國王源義教

○善隣國寶記

皇帝勅諭日本國使道淵。爾究通佛氏之旨。曉

達君臣之義。在彼境內。超於群倫。比者以其國王之命。遠涉海波。來修朝貢。達其王敬天之懇。敷其王事大之心。言調有章。進止有禮。從容恭敬。謹。朕甚嘉之。今特授僧錄司右覺義之職。俾歸本國住持天龍寺。爾其益精善道。闡宗風。益堅至誠。用副嘉獎。欽哉。故勅。

宣德八年六月初六日

○善隣國寶記

又宣德八年八月に義教の使臣僧有瑞等方物を齎し明に至りしこと皇明實錄に見ゆ。即ち八月癸丑日本國王源義教遣僧有瑞等來朝。貢馬及方物。己巳賜日本國使臣僧有瑞等六十五人綵幣絹布及紵絲襲之。有差。とあるは即ち是なり。是同時に發して後れて着きしものにして別に使を遣はせしものにはあらざるなり。

第十六節 雷春等の來使

我が國に於ては前例により道淵の歸朝と共に明

使の必ず來るべきことを察し、其の宿所及び唐船の警固につき豫じめ心を勢したるものゝ如し。

満濟准后日記に詳細記せり。次に採錄すべし。

唐人可被置在所事。可爲鹿苑寺歟。如何之由。管領畠山名武衛赤松五人方へ。意見御尋問。以慶圓法眼面々方へ申遣了。

○永享五年五月廿日の條

將軍秉燭渡御壇所。種々御雜談。唐船歸朝。若可爲二三日間歟。然者九州亂國時分。不慮子細モ出來時。旁不可然歟。可然様可有意見之由。今朝以正藏主被仰處。周防伊豫邊海賊ニ被仰付歸朝ノ船ニ可告知之條可宜歟。但猶案内存知ノ大名方へ。可有御尋之由申。云々。此條尤可然意見歟。猶明日山名ヲアル寄壇所。歸朝船無爲儀可談合云々。次正藏主ヲ召寄。大内六條家。唐人宿ニ可成條。可爲何様哉。可見智旨。可申付云々。

○永享六年正月十九日の條

山名入道來。唐船歸朝警固事。如被仰令申了。

山名申旨。伊豫周防等海賊ニ被仰付。歸朝時分。可被警固條。尤宜存也。次備後海賊村上ト申者候間可申付云々。正藏主來。大内家見知事申付了。

○永享六年正月二十日の條

茲に注意すべきことは義教が僧道淵等の歸朝に際し、其の警固を周防、伊豫の海賊並に因島の町上氏に命ぜことなり。村上は伊豫河野の一族にして伊豫に屬すれども備後に近き因島にをる故に備後といへるなるべし。此の海賊は必ずしも世に謂ふ海賊と同意義のものにあらず他の大名と同じく警固の任に當りしを以て寧ろ幕府にとり必要なる機關ともなりし程なり。故に之を懷柔せしなり。尙ほ海賊につき日本風土記に記載しあるを以て次に採録すべし。

海內行舟。患防划船。結黨搶奪。一大船出海。帶勇從百餘。多備器械方行。划船訪有出海商舟。糾集野榻百餘。共棹划船數十。圍住大船。各逞

強横。捨死抵敵。如大船勝。小船各竄。方免其掠。若划船勝。必遭其擄。大船雖勝。划船必不空。敢追至大船之前。齊々擺列。稱爲護送下情求賞。必須厚薄擣之。始止其擾。如不然纏無休息。往返難免其患。划船既得其利。各從野散。雖官兵嚴捕。勢難禁矣。故下海之舟。俱各豫防。云々とあり。

大内六條家可被點唐人宿。不可有子細歟。內々可見知之由。仰付正藏主處。今日罷向フ。不可有子細由。歸參申入也。

○永享六年七月二十二日の條

以飯尾大和守被仰。唐船來朝時。警固事。四國海賊共併備後海賊。未各罷向小豆島邊。壹岐對馬者共。不致狼藉様。能々令警固可令着岸由。

管領并山名兩人方へ可仰遣云々。

○永享六年正月三十日の條

兵庫事。可被仰付赤松播磨守歟。但猶可相尋管領之由。被仰出。其子細ハ唐船糧米。并公方様。渡御煩以下事ハ。爲洛中土藏。約可致其沙

汰之儀。無子細云々。(中略) 次唐人宿事。此間大内宿所被定置處。不慮儀出來也。何在所可宜哉。可申意見。云々。(中略) 次唐人來朝時容何所。可然候哉。同可申入云々。御返答云々。

次唐人宿事。何様如先度相尋大名一具可申入云々。

○永享六年二月廿五日の條

斯く宿所に心を勞するは使者の一行多人數なればなり。

愈々永享六年(宣德九年)五月遣明使道淵等は

明の宣宗使臣内官雷春内使裴寬玉甫原鴻臚寺少卿潘錫行人高遷等と兵庫に着岸せり。五月廿一日義教は夫人と偕に往きて之を觀、同月廿五日歸京せり。

唐船着岸壹岐島之由。自管欽方以書狀申。亥未珍重之旨。令返狀了。

○滿濟准后記永享六年五月三日の條

渡唐船共悉^五艘無爲。着岸赤間關由。自是渡遣

代官僧注進到來了。此外唐船五艘相副着岸云

々。但山名舟一艘着岸遲々。

○永享六年五月八日の條

自山名方申。渡唐公方様御舟。去月四月廿七日。自壹岐島着合島。私舟^{山名}今月一日着合島。

赤間關之間十八里云々。二艘舟定近日可着赤間歟。珍重云々。

○永享六年五月十四日の條

合島は安威島に同かるべし。日本船も五艘、明船も五艘、二艘遅れて八艘早く赤間に入りしなり。

將軍兵庫御下向。曉天云々。御臺様同御下向

云々。唐船既着室云々。

○永享六年五月廿一日の條

將軍自兵庫還御酉終云々。

○永享六年五月廿五日の條

明使に對する待遇問題の議せらるゝも當然の勢にして満濟等の意見は義滿の接待は過分なれば凡て中庸を守るべしといふにありて満濟日記に詳細なる記事あり。

以日野中納言兩條仰旨在之。唐朝牒使御對面

儀。可爲何様哉。鹿苑院殿御時御對面次第八。

誠事外御賞観。且又不可然歟。又疎儀如何。旁

大事思召云々。可申意見云々。(中略)予申入旨。

唐使御對面儀。如被仰出。故鹿苑院殿御沙汰。

事過タル様其時分内々道將入道等申候了。愚眼

所及又同前候キ。但今度御音信。唐朝歡喜無比

類。仍又日本人數百人賞観儀。超過前々云々。

如此之處。於此亦唐使以下。御賞観之儀。御沙

汰之儀候者爲本朝御興院之大事。渡使不可有其
曲歟之間。以折中儀。唐使御對面儀ハ。先可宜

候歟。(中略)今度ハ寢殿ニ被立机。被安置書斗ニ

テ。御拜以下儀。一向御略可宜哉。但猶能々可

被仰談諸人歟。次唐人宿事。仁和寺法住寺御治

定。云々。此在所若唐人意不相叶儀モヤト存

候。唐人モ定賣買ヲ本ト可仕歟。然者毎日可出

京仕。内野ヲ遙ニ可罷通條。第一路次怖畏モ可

在之歟。萬一唐人一人モ不慮儀ニ可罷逢條。日

本瑕瑾不可過之哉。次末ハ唐几黨等。毎日酒

肉賣買儀。於法住寺。不可得其使歟。然者唐人

等周章可爲勿論候歟。唐朝王爲被歸聞。第一疎

荒御賞観儀ニモヤト存候。仍此子細。内々申遣

赤松候キ。同心儀候者。可申談管領之由申旨。

内々申入了。

○永享六年五月
十二日の條

かく満濟が仁和寺、法住寺に明使の宿所御定せられたるに對し反對せるに徵しても、如何に當時の人が宿所に就て頭を惱ましたるか察知するに足るべし。

唐人來月朔可入洛。同三日可有御對面歟之由

思召也。隨御對面次第。一向被任意。可被治定

云々。予申入旨。先日御小直衣等可有何子細候

哉由申入了。雖然重仰ニ付テ猶廻愚察處。自漢

朝勅使天書ヲ持參候間。懸勦御沙汰。更ニ道理

ニモ先規ニモ不可違之由存候。應永十六年ニ勝

定院殿御對面時ハ御小直衣候歟。今度御冠御直

衣ニテ公卿殿上束帶之歟。尤宜哉。次引卒公卿事。是又候者旁珍重歟。鹿苑院殿御時。最初應永九年並十一年ハ兩人物門マデ參向候キ。若今度ハ四脚門マデ可被參向歟。猶樂人者惣門マデ參會宜存候。次御禮樣階下ヘ御降儀。於道理者。雖不相違。只今ハ先堂上ニテ大床邊歟。御參會若宜モヤト存候。所詮短慮意見串入條。且其憚千萬。令添削可有披露歟。次御所中莊嚴儀。母屋於衣四尺屏風并廣席等事。一向御略ハ可宜歟。無用様存候。次守門官人事。同前候歟。可令披露云々。

○永享六年五月
二十八日の條

六月一日明使入京。幕府は之を法華堂に館せり。
同日六月一日唐人五百人計入洛。貴賤於東寺邊見物之。六條之法華堂被入之云々。○東寺執行日記伏敵篇所收
唐人入洛酉終云々。昨日兵庫ヲ罷出。一宿瀬河云々。内官三人。外官二人。云々。今日直着

被定置宿大宮緒熊道場處。唐使申狀。不懸御目以前。先可罷着宿條。唐朝法不然。若來五日可懸御目者。猶可被點下中宿云々。仍六條法華堂昨日俄用意落着云々。

○滿濟淮后日記永享六年六月一日の條

愈々明使と面接することとなり、これにつき議せらるゝに至りしこと自然の勢なり。

以日野中納言。明後月五日唐人可有御對面條々。先度串入旨。下略御治定云々。就其昨夕如意見管領赤松兩人召具通士。今度御對面次第。降下階下給事。今度不可有之。次天書御拜事。又不可有其儀。伶人參向惣門。引率公卿出向四脚門外。可致其禮等事。具申處。唐使内外官兩人并通士等召具串入旨。先王鹿苑院殿御事也御時。惣門マデ御出。天書御拜等。殊慇懃御沙汰也。今可被略條。周章仕。第一唐使等歸國時。定此子細。唐皇帝聞食。可被罪科歟。セメテ天書於一拜ニテモ御沙汰者。可畏入。自餘ハ兎モ角爲

御意云々。所詮此申入之間。御拜事可爲何様哉。

先日愚身意見ニハ天書御拜事。神廣難測由申キ。唐使ハ只今如此申入。可爲何様哉。云々。

予申旨。先日天書御拜。神慮可爲何様哉之由申

入候シ事ハ。唐朝皇帝意得ハ。鹿苑院殿以來。

偏日本王之印トエリ付進置候間。然者御拜御勘

酌。尤珍重申了。只今就此御尋。廻愚案處。此

方上意。曾以非其儀候歟。自異朝候天書者。日

本大臣以下燒香二拜ハ有限禮儀候歟。根本御禮

不相違候上者。神慮可有何事。哉之由存候間。

若可有御拜歟。不可有苦之由存候。但猶關白前

攝政等意見可被尋聞食哉云々。○永享六年六月

當時國書の取扱方に關し通事が如何に其體面上

心を勞せしか察知するに足るべし。

かくて六月五日明使雷春等は將軍義教に謁し國書方物及び宣德勘合一百道を呈せり。義教は正服を着して之を迎へたり。

明主の我が國に雷春等を遣はせしはいふ迄も無く、道淵等の渡明に答へしものにして、彼我の交通を欲し且海寇を禁せんことを望みしに外ならず。其の國書は次の如し。

皇帝勅諭日本國王源義教。朕祇奉天命。嗣祖宗大位。以主兆姓。臨御以來。夙夜孜孜。惟天惟祖宗之心。體而行之。綏撫天下。一視同仁。是以海內海外。凡日月所照。臨之處。慕義歸化。

悉順悉臣。今者王遣使道淵。奉表來朝。并獻方

物。敬天事大。具悉至誠。甚嘉之。惟王日本表

秉禮義。我國家肇造區宇。恭修職貢。未嘗或怠。

逮爾父王道義。事我皇祖太宗文皇帝。恭謹之誠貫于金石。石是以皇以皇祖天恩游加。亦超越夷

等。載在國史。永永老華。爾父既沒。使命不通。

蓋亦有年。王今嗣主國事。獨能持忠孝之志。修

繼述之功。所謂卓然聰明特達者也。雖古賢王何以過哉。夫有厚德者。天必錫之以厚福。王繼今

務德。益勤弗懈。將福祿之臻。豈可量哉。茲遣使內官雷春副使內使內寃王甫原鴻臚寺少卿潘錫行人高遷齋勅往諭并賜王綵幣等物。以示嘉悅之意。王其勉之敬之。用副朕懷。故諭。

宣德六年六月十一日

○善隣國寶記

尙ほ別副あるも文煩はしければ省略すべし。雷春等が齋し來れる勘合は其咨文を附せり。

行在禮部爲關防事。該

欽依照例。編置日本國勘合。

查得。洪武十六年間。欽奉太祖皇帝聖旨。南海諸蕃國。地方遠近不等。每年多有蕃船。往來進貢。及做賣買的人。多有假名託姓。事甚不實。難以稽考。致使外國。不能盡其誠歟。又怕有去的人。詐稱朝廷差使。到那裏生事。需索擾害他。不便。儻禮部家。置立半印勘合文簿。但是朝廷差去的人。及他那裏差來的。都者將文書。比對

硃墨字號相同。方可聽信。若比對不同。或是無文書的。便是假的。都拏將來。欽此。除欽遵外。今置日字一號室一百號勘合一百道。底簿二扇。本字一號至一百號勘合一百道。底簿二扇。內。將二字號勘合。并日本二號底簿二扇。收留在。此處脫字アルシ及將本字號勘合并日字號底簿一扇。差人齋赴日本國收受。將本字號底簿一扇。發福建布政司收貯。

今後但有進貢。及一應客商買賣來者。須於本國。開填勘合內。開寫進貢方物件數。本國并差來人。附搭物件。及客將物貨。乘坐海船幾隻。船上人口數目。逐一於勘合上。開寫明白。

若朝廷差使臣。到本國。須要比對。硃墨字號相同。方可遵行。使臣還本國。如贈物件。亦須於勘合內逐一報來。庶知遠方禮意。如無勘合。及比對不同者。即係詐偽。將本人言送赴京。施行。

今將日字號底簿一扇。本字號勘合一百道。發去日本國收受。書填比對。施行。右置訖。

宣德捌年鶴月日

○戊子入明記

自其參入。道するら奏樂於馬上吹樂見物雜人群集數萬人。希代之見物也云々。委細事未聞。入江殿御所ニ。御喝食。東御方。御乳人。室町殿於御機敷見物云々。
○看聞日記六月五日
の條、伏敵篇所收

此の文の示すが如く日本の二字を分ちて日字號勘合及び日字號底簿と本字號勘合及び本字號勘合底種を編置し而して日字號勘合は之を禮部に置き

本字號勘合を日本に齎して之と比較すべき底簿を

北京禮部に留收するものとして其の組が明國を主とし日本國を從とせるは敢て怪しむに足らざるなり。

唐使御對面。將軍御冠直衣。云々。唐使引卒。公卿兩人。
○三條前大約御門右府前内左臣 參向四脚門。冷人參向惣門。公卿殿上人。中門外東上南面列立。天書御拜事。今度有沙汰。二拜御沙汰云々。御披覽事。臨期在之。唐使頻申入云々。

乍立御披見云々。鹿苑院殿御披見時ハ御蹲踞。

今度依關自意見。母屋庇室禮仍母屋庇迫北。立曲景一脚。主人御座母屋西曲景二脚。庇曲景三脚被立之。唐使著彼。云々。內官三人。外官二人。唐使臨下下時分。將軍令出大床給。天書御禮云々。

唐使室町殿參入之儀嚴重。申刻參。官人五人。
輿騎馬輩雜人等六七百人。進物辛櫃五十合。鳥屋十籠鷺眼三十萬貴云々。樋口大宮道場爲宿。

儀鹿苑院殿御代。最初應永九年時在之由。正藏主申入間。御沙汰云々。其時予參扈從。一會之儀。雖拜見茶禮之儀分明ニ不覺悟。今度御茶給仕。何者沙汰候哉。追可尋記。由官建蓋ヲ取遣進云々。唐禮歟。次進物官人等。自身取出。積置御前如山云々。四脚惣門警固強無之云々。路次辻々事。被仰付諸大名。云々。

今日唐人一献。斯波治部大輔云々。公卿殿上人參上。

唐使參上

此の月十九日義教は雷春等を室町の第に宴す。
二十九日雷春等幕府に朝す。八月五日明人俚樂弄火技を幕府に奏す。十九日雷春等幕府に朝し歸國の暇乞をなし、二十一日兵庫に下向し九月三日兵庫を出航、歸國の途につけり。

○滿濟准后日記
六月五日の條

雅 永 朝 臣 爲 清 朝 臣
爲 之 朝 臣 持 唐 朝 臣
持 俊 朝 臣 永 豊 朝 臣
豐 資 任 益

雅

親

資

益

○滿濟准后日記
記看聞日記

第十七節 僧仲誓永頃等の遣明

三條前右大臣	大炊御門前内大臣
中御門大納言	按察大納言
飛鳥井中納言	中御門中納言
日野中納言	三條中納言
中山宰相中將	源宰相
殿上人	

永享六年（宣德九年）九月三日雷春等歸明す。

○看聞日記永享六年九月三日の條 義教僧仲誓永頃等を使僧とし、初めて宣德勘合の第一號より第六號に至る六道を携へたる六艘をして渡航せしめ、永樂の本字勘合殘

餘五十七道及び同日字勘合一百道の底簿一扇。

○善隣國寶記宣德九年八月廿三日別副を明國に還へし、方物及び表を齎し以て報聘せしむ。表文の意は例の如く交聘の渝らざることを欲せし者にして次の如し。

寶隣修好。所愧乘韋惟光。溟量包荒。何唯雜佩以報。爭覩使者光采。則知官儀中興。阡陌竦瞻。山川增重。中謝。共惟皇帝陛下。奉天紹運。濟世安民。眷僻居於遐方。孰興起於盛際。事大誠仍舊貫。權宜要在更張。秋水長天。極目雖迷。昌厥後。

○善隣國寶記

中贊等は翌永享七年（宣德十月）十月北京に到り明主に謁し方物を賜りしものゝ如し。
日本國遣使臣、中贊等來朝。貢馬及方物。賜宴。并賜綺絲紗羅絹布銅錢有差。仍命齎勅及白金文錦綺絲衣裏紗羅等物。歸賜其國五及妃。

○皇明實錄宣德十年十月癸巳丑條

永亨八年（正統元年）七月、僧中贊等明より歸り明主英宗の復書及び方物を幕府に獻せり。

遣唐使恕中和尚歸朝。怒中は被參御所。四日。大唐詔書以億阿被預置。方物之日記並箱同鎮子皆有之云々。

○薩涼軒日錄同年七月二日條

中贊等の齎し歸れる明主の制書は義教の貢獻を嘉納し、尙ほ宣宗の時の如く好を通せんことを欲せしものにして其の文は次の如し。

皇帝勅諭日本國王源義教。我國家統有天下。薄海内外。罔不臣服。列聖相繼。無間遠近。一視同仁。爾日本爲國東藩。世修職貢。益永益虔。

我皇老宣宗皇帝臨御之日。恩眷尤厚。今遣使中贊等。奉表來朝。並獻方物。禮意勤至。朕嗣承祖宗大寶。期與四海群生同樂雍熙。矧王篤於事大。良可喜尙。使者還。特賜王及王妃白金綺幣。以答五意。王其欽崇天道。仁恤有民。永保蕃邦。

以副望。故諭。

正統元年二月初四日

○善隣國寶記

かくて彼我の交通益盛とならんとする時に當

行

り、將軍義教は赤松滿祐の弑するところとなり、

彼我の交通暫時斷絶し後年義政時代に至り始めて

復舊せり。

「参考書目」

皇明實錄。明史。蔭涼軒日錄。滿濟淮后日記。

宮島貞亮

戊子入明記。京都將軍家譜。大乘院日記目錄。

善隣國寶記。後鑑。伏敵編。史學雜誌第三十一編第四號「柏原昌三氏、日明勘合の組織と使